

第 21 回環境問題研究会セミナー

演題「世界の宗教と神話に土壌を読む」 その 1

講師：陽捷行（みなみ かつゆき）

北里大学名誉教授・農業環境研究所農業大学校長

2018年3月17日 大山街道ふるさと会館 3階

3年前の2017年5月10日の第10回環境問題研究会セミナーで、「土壌・人間・環境」-健体康心を求めて-と題して、陽捷行先生による講演が行われました。

大変深い感動に満ちた内容と、笑いとユーモアに溢れた講演で大変好評でした。

そこで2度目のご講演をお願いしたところ快諾して下さい、今回の講演となりました。

今回も前回と同じく、大変好評な講演会となりました。

1時間以上にわたる講演のため、数回に分けてご報告したいと思います。

世界の宗教と神話に土壌を読むとは？

今日は「世界の宗教と神話に土壌を読む」という話です。

先回は、地球環境の話を行いました。

環境がなぜ大事かという、環境は我々の産物なのです。環境が勝手にあるのではなくて、人が環境を作り、環境が人を作ったり、人と環境が連携しながら生きているということです。

例えば、アジアでは何故あのような人間が育つのか？

それはアジアの環境の故だからです。

北欧では何故あのような人間が育つのか？

それは北欧の環境のせいです。

また北欧の人々は、それを環境に投げかけているのです。

例えば、スウェーデンに行ったら街を歩いている、スーッと木が立っているような感じの人が沢山います。

やはり環境が影響しているような気がします。

南の方に行けば黒い顔をしてニコニコしながら、ドーパミンを沢山出しています。

太陽に当たるとビタミンEが出来ますし、または食べ物の様子によってドーパミン物質やセロトニン物質が出来て、それが脳に行き、それでいつもニコニコしています。

そんな風に、風土というものは、夫々の人々が風土を作り、人々が風土を作っているという風に思います。

今日の話の「世界の宗教と神話に土壌を読む」というのは、環境の問題を別の切り口で切ったとだけ思っていていただければいいと思います。

先回も自己紹介のお話をしましたが、名前は陽捷行（みなみ かつゆき）と申します。



生まれは山口県の萩市で、萩天満宮の宮司の息子で、次男坊で食えないから、農水省に出稼ぎに行き、それでもまた食えないから北里大学に行き、今まだ食えないから農業大学校長していますが、まあ今の仕事はボランティアですがね。

漢字というものは、今から36世紀ほど前、中国の商(殷)王朝の湯王が、神との交信のために漢字を作ったのです。亀の甲羅に書かれたので甲骨文字といいますが、紀元前17世紀~紀元前11世紀後半にかけてでした。

陽という字の左側のこざとへん：阝(こざとへん)という字は、「旗」或いは「梯子」を表しています。

従って神が梯子から降りてきて、日という字、これは勾玉を意味します。

それで右側の旁(つくり)の「易」という字は、机の上で勾玉が光沢を発している姿を表しています。

そこに神様が降りて来てくださって祭典をしますよという意味が、陽(みなみ)という字には込められているのです。

中国には陽という字がつく地名が沢山あります。

漢陽、瀋陽とかありますが、そこでは古来式典を行っていたのです。

また勾玉の光は、別の意味で様々な漢字として用いられたのです。

例えば「場」という漢字ですが、「土」という字は、昔は神様を祀る時は、土を三角形に盛って神様の式典をしたのです。

「揚」のように「木」偏だと「木」の所に旗を立てて、神様ここで式典をやってくださいという意味なのです。

「揚」の場合は、神様ここで式典をしますからと、神様を手招きして呼んでいる意味となります。

「湯」は偏が三すいですから、川の傍で式典をやるという意味です。

陽(みなみ)という漢字の、語源からの自己紹介でした。

【陽捷行先生の文献より抜粋

(講演の理解のための引用です)】

地球生命圏ガイア

グローバルブレインアースマインドとは

「すべてが変わったのは、1969年のことである。

今から49年も前のこの年、われわれは、宇宙船アポロ号が撮影した青い地球の写真の中に、初めてわれわれ自身を見た。

その時からわれわれは、自分自身を地球全体から切り離すことが出来ないという自覚をもった。

全体としての地球は、想像を絶する巨大な生き物かもしれないという自覚である。

1969年は、イギリスの生物・医学者ジェームス・ラブロックが、地球は太陽系の中で最大の生き物(地球生命圏ガイア)であると思つた創造的な年でもあった(ラブロック、1984)。

今ではガイア理論といわれるこの理論は、地球を巨大な生命体とみなす仮説に由来する。

この考え方は、今でも多くの科学者、宗教家、政治家および芸術家などに大きな影響を与えている。

ラブロックは当初、この理論を「自己統制システム」と命名した。

後にギリシャ神話の女神「ガイア」にちなんで、地球生命圏ガイアと改名した。

現在、地球生命圏は、自己統制システムまたはガイアという生きた大地の象徴として認識されている。

このような生きた大地の概念は、過去にも多くの神話、宗教、および伝承の中に見られる。

後で詳しく述べるが、人間(human)は土壌(humus:腐植土)から造られたという旧約聖書の話は、その良い例であろう。

また、生きている地球生命圏ガイアの認識は、地球は脳を持つという概念に進展する。

ピーター・ラッセルは、「グローバルブレイン」を書く(1985)。

さらに、地球は生きており意識をもつうえに、心を有するという本「アースマインドー地球は人類の廃棄を意図し始めたー」(デヴェロー等、1991)が出版される。

…ところで、地球や大地という視点に立ってみたら、われわれはヒトの皮膚の薄紙のような土壌の上に生きている。

…多くのことばと事物は、過去にあつて現在にもある。

しかし一部のことばや事物は、過去にはなくて、現在あるものもある。

あるいは生まれつつある。

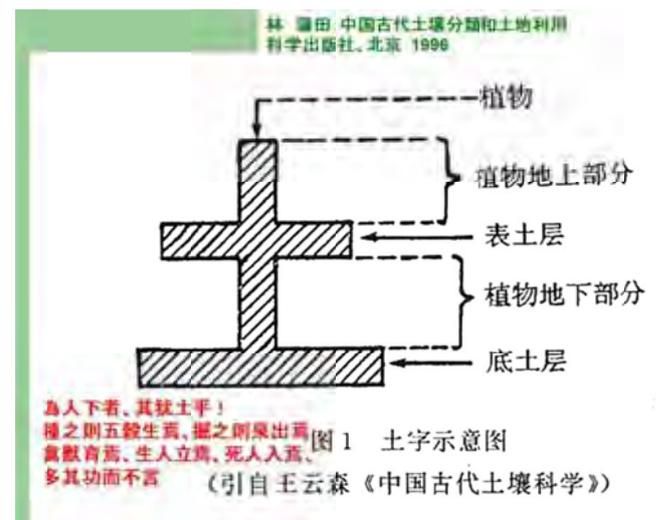
また一部のことばや事物は、過去にあつて現在はなくなっている。

過去と対話をしないで、現在と語るだけであれば、生きるだけならどうにか生きることが出来る。

しかしそれでは、自分たちがどこにいるのか、どのような道程をたどってここにいるのかさえわからない。…

ガイアが生きており、脳を持ち、心まで持つというこれらの考えは、人類の歴史を見れば今に始まったことではない。そこで、地球、大地および土壌について、人間が古往今来どのように対応してきたかを知るため、世界の神話、宗教および伝説の一部を探索する。

そこから、世界の人びとが大地や土壌をどのように感知し、認識し、活用していたかを知る。」



「土」の字の意味するものとは 驚くべき孔子の「土」への理解

白川静という人が「字読」「字訓」「字通」という3冊の本を著しました。

今日は「土」の話をするので「土」という字を紹介します。
(「土」「生」「世」「姓」)「土」という字は象形文字です。

一(上の横棒)は表層、_(下の横棒)は下層、真ん中は土の根っ子、上は芽が出ている。

これが「土」なのです。

「土」という字はまさに象形文字の代表なのです。

その後「土」という字が進化発展して「生」、生まれるという字になります。

その次に生まれるという世界の「世」になります。

それが成長してファミリー、苗字の「姓」になります。

この「姓」という字には「男」という字は入っていませんね。

「女」という字が入ります。

「土は」母なる大地。

英語では MotherEarth といひまして、物を生んでくる所なのです。

肥料の「肥」、「妊む」という字は女偏です。

「妊む」という意味においてファミリーネームになります。「土」という字ですが、孔子の言葉に、素晴らしい言葉があります。

「人の下なるもの、そは尚、土か。これに植えれば五穀が生じ、この下を掘れば水が泉のように湧く。

禽獣(生き物)が育ち、人が生まれて行く所であり、死んでいく所である。

これほど多くの特性を持っているものはありません」ということを孔子が言っているのです。

孔子は儒教の教祖で、具体的なことはあまり言わず、抽象的なこと「巧言令色、鮮仁」(こうげんれいしよく、すくなしじん=言葉巧みで表情を取りつくろっている人は、かえって仁の心が欠けているものだ)というように、抽象的な言葉が多いのですが、孔子は「土」という言葉をきちっと理解していたということで、それからファンになり、孔子様、孔子様というようになりました。

「土」が重要で素晴らしいということを知っていたということに、私は感銘を深くしました。

土壌は生き物ではないのか

地球生命圏ガイア

グローバルブレイン・アースマインド

土が生き物と同じように、生き物ではないのかということをお話しようと思います。

「地球生命圏ガイア」という言葉があります。

地球が生き物であるという概念です。



この考えをジェームズ・ラブロックが言い始めました。
(「地球生命圏—ガイアの科学:1984」「ガイアの時代:1989」「ガイアの復讐:2006」)。

昔、地球誕生時、地球の大気は 98%が二酸化炭素(CO2)でした。

ところが炭素(C)を食べ、酸素(O2)を排出する微生物(シアノバクテリア)が増えていくと、段々と二酸化炭素が減り、代わって酸素が増えていきました。

最初は地球上にほとんど 0%だった酸素が、今から約 4 億年前に約 21%になってピタッと増加が止まったのです。

私達は今、21%の酸素の中で生きています。

もし大気中の酸素の含有率が 22%になったら、地球上に酸素が多くて山火事(森林火災)が発生します。

逆に 19%になったら、そこらの鳥は飛ぶことが出来ませんし、私達もゼイゼイって呼吸困難になります。

ところが地球は、ほとんど 0%から始まって最後は 21%でピタッと止まるのです。

何故か地球は、自分で 21%の酸素を維持(自己管理)しているのです。

もう一つの例ですが、海の水の塩分濃度は何%ですか？

3.5%ですね。

子供の頃、海の水が何故塩辛いのか学びました。

雨が降って山から水が流れ、水が岩を溶かし、塩分を溶かして海に流れ込むと、海に段々と塩が溜まって塩辛くなり、塩分濃度が 3.5%になったのだと。

しかし今から約 6 億年前から、地球の塩分濃度はずっと 3.5%のままです。

何故か地球ガイア圏が自分で 3.5%にコントロールしているのです。

その理由が何かというと、海底には海洋プレートというものが、毎年数 cm~10cm ほど動いています。

この海洋プレートが、どんどん海溝に沈み込んでいくので

す。

地球表面には大陸プレートと海洋プレートが合わせて 10 数個ありますが、日本列島周辺には 4 個もの大陸プレートと海洋プレートがぶつかっています。

それで日本は世界でも有数の地震大国と火山大国になっているのです。

しかし今なお、地球の海の塩分濃度は 3.5%なのです。

何故でしょうか？

それは地球ガイアが自らコントロールしているからです。それが地球生命圏ガイアが生き物であるという考え方で

す。ということで太陽系で一番大きい生命は、「地球生命圏ガイア」であるという言い方をします。

この後ピーター・ラッセルが「グローバルブレイン」という考えを 1985 年に発表します。

グローバルブレインとは、地球は生きているが、実は「脳」を持っているという考え方です。

具体的な例として挙げているのは、約 1 億 5 千万羽の「みずなぎ鳥」が、距離にして 10 マイル(約 16km)にわたり、オーストラリアとタスマニア島の間で観測されました。

鳥の群れを撮ったスローモーションのフィルムは、5 万羽の鳥が、先頭の鳥が向きを変えたら、70 分の 1 秒以内に

一斉に方向転換することを明らかにしました。

先頭の鳥と最後尾の鳥が瞬間に方向転換出来るのです。

その鳥たちは地球ガイアと繋がっている。これが、地球生命圏ガイアは「脳」を持っている、「グローバルブレイン」という考え方です。

そうすると次に出て来るのは、ポール・デヴェローの「アースマインド」という考えです。

フランス人画家のユトリロ(1883~1955)は、木と話が出来たそうです。

木は心を持っていて話をする。

人間も心を持って木と話が出来ると書いてあります。

同じことはインディアンも言っていますし、オーストラリアの原住民のアボリジニも言っています。

木や石と話をするというのです。

ユトリロによると木は人と話をする事が出来るが、人が木と話をする事が出来なくなっていると言っています。

私の友達に元東京農大の進士五十八という人がいますが、この人に娘さんがいて、「うちの娘は木と話が出来ると言います。」

そういうことを思っている人がいるかもしれないし、脳がそ

れを感じているのかも知れないのです。

脳が錯覚を起こしているかもしれませんが、木と話ができる人がいるんですね。

現にユトリロがそうだったということです。

ラブロックが「地球生命圏ガイア」を書き、ラッセルが「グローバルブレイン」、ポール・デヴェローらが「アースマインド」を書きましたが、彼らは皆博士号を持った理科系の男達で、ラブロックは NASA(アメリカ航空宇宙局)でも仕事をしていた科学者ですし、探検家、統計学者もいます。そういう人たちがこういうことを言っているのです。



(次回に続きます)

第 21 回環境問題研究会セミナー

演題「世界の宗教と神話に土壌を読む」 その 2

講師：陽捷行(みなみかつゆき)

北里大学名誉教授・農業環境研究所農業大学校長

2018 年 3 月 17 日 大山街道ふるさと会館 3 階

土壌圏を中心とした大気圏、生物圏、水圏、地殻圏と中国思想の木火土金水の類似性

地球が出来た時には、時間と空間とエネルギーしかありませんでした。

ところが地球が段々と収まるようになって、大気圏、生物圏、水圏、地殻圏、土壌圏が出来ました。

大気は大気圏、水圏は海の圏、地殻は見えないが地球内部の地殻圏、そしてこれらの中に出来たのが土・土壌圏です。



土壌圏はどことも繋がっています。

土の養分を食べて生物は出来ます。

土からガスが出て大気圏と繋がっています。

大気の酸素は土に吸収されています。

水圏は、水に吸収されて土に繋がっています。

地殻圏は地殻があるから土壌圏が出来ます。

そしてこの後に何が起きてきたかという、人間圏が入ってきた訳です。

人間圏は現在 75 億人です。

人間圏が出来てきたことが、大きな迷惑です。

地球は人間が好きでも嫌いでもありません。

たまたま入ってきた邪魔者だから、地球は人間圏が崩れても平気です。

人間圏などは無かった訳ですから。

地球上に 5 万人の人間がいた時には、人間圏ではない訳です。

何をしてもいい訳です。

強盗してもいいし、倫理観なんかいらぬ訳です。

しかし、人間圏が出来たから、この地球上全体を考えてみて、このことを頭の中に入れておくことは非常に重要なことです。

公害というものがありますが、公害という言葉は、人間圏が土壌圏を乱し、大気圏を乱したという考えでいけば、公害という小さな話ではなくて、地球対人間圏の対立なのです。

これ以外にもう一つ、人智圏があります。

ドイツの学者で、昔のオーストリアのシュタイナー博士が人智圏という概念を発表しました。

人智圏、テレパシー、人の考えが伝わるといったのです。

土壌圏は、最も重要な中心になるものです。

中国の思想に木火土金水という言葉があります。

世界の物質や全ての物はこの木火土金水からなっている。その中で土は真ん中にあるのです。

土壌圏が中心にあるという考えは、木火土金水の考えによく似ているといえます。

「文化土壌学のススメ」とは?!

今日お話する内容は、文化土壌学という内容です。

文化土壌学というのは、古来、どんな土が出来てきたかとか、どんな土にどんな植物が生まれるとか、化学肥料をやった後、どのような養分が出て来るかとか、そういうものを土壌の植物の生産のために勉強してきました。そこで私はこの新しい文化土壌学という部門を、12 年前に土壌学会の中に作ったのですが、それは全てのことが、全ての文明が、土壌と関係しているというコンセプトです。

土壌と文化とどういった関係があるかという、間違いなく土壌と文明は繋がっています。

1. 土壌と文明

2. 土壌と文化

土の語源、土と霊、土壌と思想、土壌と宗教、土壌と神話

3. 土壌と生業(なりわい=生きていくための仕事)

これも大事なことです。

陶器、陶器と土壌がいかに深く関係しているか。

染物、大島の土染、まさに土を使っています。

化粧品にも土を使っています。

女性の皆さんは顔に土を塗っているのです。

製紙、紙も土を使っています。

クッキー、美味しいですがこれにも土が入っています。

土が有害な物質を吸収して体外に出して、腸内を綺麗にしてくれるので、体にいいのです。
酒を造るのにも使います。

4. 土壌と健康

土食あるいは食土という言葉もあります。
ジオパジーということばがありますが、世界には土を食べる民族が今でもいます。
一つの例として、アフリカでは、結婚した女性が土を食べ始めたら、皆でお祝いするのです。
土の中に亜鉛が入っています。
亜鉛は子供にとって不可欠で、妊婦が欲しがります。
日本の妊婦は、土を食べたい、亜鉛を食べたいとは思わないでしょうが、アフリカでは今でも土の棒を売っています。
食糧店に行くと土を売っていてそれを食べるのです。

5. 土壌と文学

これが素晴らしい。
まず、宮沢賢治がいます。
犬養道子、土のことをよく書いています。
Dの文豪トストワキ。
これもとても面白い。
「罪と罰」の作品の中でラスコーリニコフとソーニヤが、最後に道路の真ん中で、大地に接吻するのです。

6. 土壌と倫理

これも大事なことです。
私達は人間同志は互いに倫理をもって接しますが、土と倫理観念をもって接したことがありますか。
土にも倫理観念をもって接しないとイケません。
或いは自然にも倫理観念を持たないとイケません。
そうしないと自然が人間に復讐するということです。
心の進化、大地倫理、文明の継承など。
こういうものをやるのが、文化土壌学というつもりです。
私達が生まれて死ぬまで、皆んな土と関係しているのです。
それに気がつかない、或いはそういう教育をしていないのです。
今日のお話は、世界の宗教と土がどのように関わっているかという話です。
世界の主な宗教は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、儒教、道教、仏教、神道、ヒンズー教。
これらが土をどのように考えていたかということをお話したいと思います。

世界の宗教に土壌を読む！！

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に共通する 神観、土、人！！

古来、人々はみな土のことを考えていました。
神話もみなそうです。
ところが土のことを考えていない神話の一つだけあります。
北欧神話は氷が神様です。
寒くて大地が氷に覆われているからです。

宗教でまずユダヤ教、キリスト教、イスラム教、この三つは一神教ですね。
エホバ、ユダヤ教は民族宗教ですから世界一般ではありません。
イスラム教は、後で拡大していきました。アラーの神ですね。
他には仏教、道教、神道、ヒンズー教があります。
ちなみに私は神道です。
神道の宮司の家に生まれたからです。
こういう宗教が世界の土壌と大地を、どのようにとらえたかという話です。



まず結論を申し上げます。
ユダヤ教は、一神教で世界宗教ではなく民族宗教です。
キリスト教は世界宗教です。
誰でもいいという訳です。
一神教のユダヤ教は、土塊(アダマー)から人(アダム)を創った。
土から取って人を創ったとあります。
次にキリスト教は土塊(humus)から人(human)を創った。
humusとは有機土壌のことです。
専門用語では腐植ということですが、全体を有機体土壌(humus)といい、これから human を創ったといっています。

イスラム教では、土(アダム)から人(アダム)を創ったとっています。

一方、仏教は極楽浄土、こういうのは皆、土ですね。皆さん地獄に行かないで浄土に行きたいと思いますね。ところで地獄に行かない方法は、仏教では道祖神を作り、お地蔵様を拝めば地獄に行かないそうです。

道教は、中国の多神教で現世利益です。土地神として、后土神など三つの神様を拝むことによって、人々は安定させられるということです。

神道は、まず伊勢神宮の外宮に、土の宮というお宮があります。

他に風の宮があります。

蒙古が日本を攻めてきた時に、皇室がそこに拝みに行くと、風が吹き、それを神風といいました。

蒙古がやられたのは、皇室が風の神様に拝みに行ったからです。

それ以外は皆、土の神様です。

ヒンズー教は、大地神としてプリティビーというのがいます。

キリスト教では、犬養道子が訳したのですが、土壌(humus)、類人(homo)、人類(human)となり、人間性のことを humanity といいます。

最後に素晴らしいのは、謙虚さ、humility という言葉がありますが、これは humus から来ていると犬養道子言っています。

humus、homo、human、humanity、humility ということは素晴らしいことですね。

これが結論です。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖典は、それぞれヘブライ語、ギリシャ語、アラビア語で書かれています。そこには皆、土から人が創られたと書かれています。この三つの宗教は、一つの教えから派生し、現在キリスト教 21 億人、イスラム教 13 億人、ユダヤ教 0.15 億人となっています。



ユダヤ教は、神の名を「ヤハウエ」「ヤーベエ」といいますが、「神の名をみだりに呼ぶなかれ」とあるため、信者はこの名を口にしないが、非常に明快に、人間は神にはなり得ないと言っています。

仏教では成仏といい、悟ったりすると仏様になれるわけです。

でも皆、なかなか仏様になれないから、仏様の形を作って拝むわけです。

我ら凡人は、仏陀のように悟りが開けない訳です。

ユダヤ教、キリスト教は、人間は男と女、男はアダム(アダマー)からで、これが人類を意味しました。

そしてアッカダー(典礼所)によれば、大地の四隅から土塊を取ったので、世界のどこで死のうが大地は人間の遺体を拒まない。

何故なら人間は土から来たからです。

これがユダヤ教の土と人間の関係です。

それで地球のことをマザーアース(mother earth、母なる大地)というのです。

また靈魂は神から与えられたものなので、「塵は元のように大地に戻り、霊はそれを与えられた神に戻る」と言っています。

土は重要な要素ですね。

旧約聖書には、主なる神は、土(アダム：ヘブライ語)の塵で人(アダム)を形創り、その鼻に命の息を吹き入れられた。

人はこうして生きるものとなった。

人間(homo)は大地(humus)からきます。

それが人間性(humility)となります。

エバ(女)は「命」で、「すべて命あるものの母」となります。

「その時神は土塊(つちくれ)で人の形を創り、命の息を吹き込んだ。

すると人は生きたものとなった」ということで、人は土から創られた。

土と人間はすべからく命の源であるということを行っています。

カトリック信徒の犬養道子は、「ラテン語では、大地と人間と謙虚は語源は一つ。

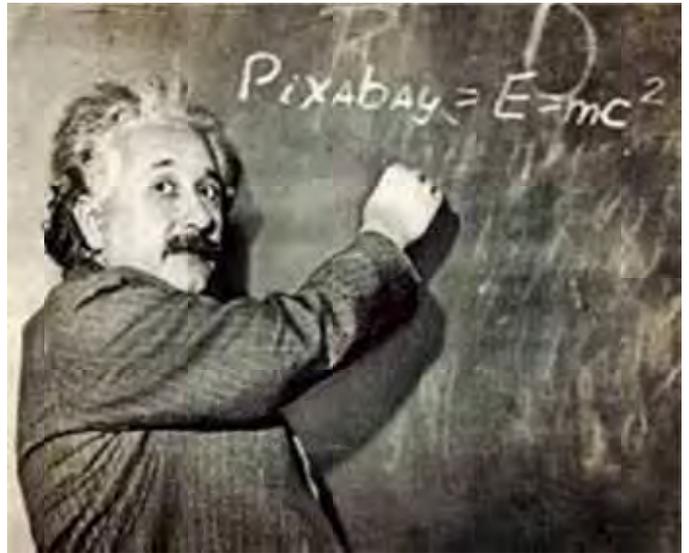
大地は humus、そこから homo、human が生じ、正しい心的態度としての humility(謙虚、謙遜)が生じたといっています。

土を大事にしなければいけないということが分かります。理由はいろいろあります。

宗教と科学 紙の表と裏の関係！！

私達は悪い習慣が身につきました。
科学で証明されなければ正しくないとか言っています。
実は科学というものは、中世ヨーロッパでは、宗教で説明できないものを科学が説明したという、紙の表と裏の関係があったのです。
しかし、日本の国に入った時、宗教と科学は別のものであるということを教え込まれました。
それが皆の頭の中にこびりついていて、
ところが本当は、宗教では説明できないものを科学で説明しようとしたのです。
つまり紙の表と裏の関係なのです。
アインシュタインはいつも「神が言ったことを私は解いた」とか、「神が石を投げると言った」とか言いました。
あの時はまだ神が生きていましたね。
 $E=mc^2$ (アインシュタインの有名な質量とエネルギーの等価性の原理)
これアインシュタインは「神の謎を解いた」といつも解説していました。

宗教と科学は一体、表と裏の関係であったのですが、科学を日本に導入する時、過ちを犯しました。
一度過ちを犯すと、ボタンの掛け違いで「宗教と科学は別だ」という思想が浸透してしまいました。
金子みすずの詩にありますね。
「見えないものでもあるんだよ。昼の星は見えないけれど、夜になったら星はある」と。
皆さん、X線って見えないでしょう。
しかしX線・レントゲンをかけたら、どんな美人だって骨だけですよね。
見えないものが見える訳ですよ。
金子みすずの立派なことは「見えないけど下には根っ子がありますよ 根っ子の周りには土がありますよ」という詩がありました。
真実をよくついていますよ。
「こつんこつん打たれる土は良い土になって、良い麦を生むよ 踏まれる土は、良い泥になるよ つまらぬ土はいらぬ土か、いやいやそれはお花のお宿をするよ」。
これだけの三つの土の役割を、食物を生産する土、人間が生きていく大地、つまらぬ土は綺麗なお花のお宿しているのだよと。
私が1時間かけて話すことを、たった一つの詩で皆に伝えるんですね。
癩に触りますよね。
だけどキリスト教から humility という言葉が生まれることに喜びを感じますね。



一神教の神観と土と人！！

イスラム教は原点が旧約聖書ですから、神観と土と人はユダヤ教、キリスト教と同じだということを言っておきます。
一神教について今迄言ったことを纏めてみると、

1. 土は旧約聖書の中に永続的に生き続けている。
2. 神は土の塵で人を創った。
人間(homo)は、大地(humus)から創られた。
それが humanity である。
3. アダムとはヘブライ語で、土・人間の二つの意味を持つ言葉に由来する。
4. イブはヘブライ語でハブアといい、生きる者または生命の意味である。
5. 人間は土に帰る。そこから取られたのだから。
6. 土は人間誕生にも、地球誕生、鳥獣誕生、作物生成、休耕、休息、祭事など様々な事象に関わっています。

以下、次回に続きます。

文責：環境問題研究委員会 赤城勲
2018年5月24日

第 21 回環境問題研究会セミナー

「世界の宗教と神話に土壌を読む」その 3

講師：陽捷行(みなみかつゆき)

北里大学名誉教授・農業環境研究所農業大学校長

2018年3月17日 大山街道ふるさと会館

仏教と土と人 極楽浄土と輪廻転生！！

仏教では、人は神には成れないのです。

成仏(仏になる)することが出来るということです。

仏になるということが、行き着く先は『土』という言葉が付き、皆、成仏を目指す言葉になります。

浄土がそうです。

しかし成仏できない者は、次に生まれ変わり、輪廻転生することになります。

いい階級に生まれ変わろうとするから、輪廻という概念が生まれてきたわけです。

インドに行くと、アンタッチャブルといわれる人々がいます。

触ってはいけない下層民のことです。

下層民を生かすために、輪廻という概念が生まれてきたわけです。

次の時にはアンタッチャブルではないぞ、次の時にはもっと位の高いところに行けるよ。

というように輪廻を刷り込んだのですね。

ですから成仏できない人は輪廻です。

立派な人はすぐ成仏できますよと。

「僕なんかもう1回位輪廻があるのではないかな。もしもう一度生まれ変われるなら女性に生まれ変わりたい。あの素晴らしい子供を産むという力。これを一度体験してみたい。でも痛いだろうなと思います。」

例えば浄土は、仏や菩薩の住む清らかな仏国土で、阿弥陀如来の西方・極楽浄土を指します。

極楽浄土、土、大地なんです。

浄土は報土でもあります。

他にも浄瑠璃国浄土、観音浄土、靈山浄土が有名で、いい所は皆土なのです。

冥土は死者が来世に転生する迄の、彷徨する世界です。

輪廻転生先がまだ決まらない状態で、沢山の霊がいるから転生する順番が大変でしょうね。

仏教は土と関係しています。

仏教用語では、厭離穢土(おんりえど)：現世。

欣求浄土(ごんぐじょうど)：極楽浄土に往来。

寂光浄土(じゃくこうじょうど)：真理そのものの世界。

極楽浄土・安養浄土・四方浄土：阿弥陀仏の居所。

天台四土：四種の仏土(仏のいる浄土)。

穢土浄土：穢れた国と菩薩の住む国。



仏教でもそうであるように、土を抜きにした宗教は無いということです。

道教と土と人 極端な現世利益

道教には神様がいません。

仙人になること、不老長寿になることが目的です。

だからあの世に行ってなんて考えないのです。

中国人がその場主義というのは、こういうことから来るのです。道教の思想故なのです。

中国では、食べたらゴミを机の下にすぐ捨てるのです。

特急なんかに並んで待っていると、力の強いおじさんが割り込んできて乗っていくのです。

女性なんか取り残されます。

これは、今が幸せで天地と共に長生き出来れば幸せなのです。

徹底した現世利益なのです。

だからこの国、中国が資本主義になったら、最高の資本主義になるでしょう。

皆、勝って勝って、負けた奴が悪いんだということになるのかも知れません。

道教の土地神についてですが、道教には三つの土地神がいます。

后土神(后土)・城隍神(城隍爺)・福德正神(土地公)の三神です。

后土神は墓の守り神ですが、城隍神は役所の城壁の守り神で、出世したり失落したりするのです。

儒教と土と人 孔子と徳富蘆花の土に関する名言！！

儒教は東アジア各国に広まっていますが、孔子教とか孔子の教

え、儒教思想ともいいます。

祖先祭祀を伴う招魂再生の考え方で、聖人を目的としています。魂が帰ってきて、また出かけるという意味で、中国というのは、ファミリー(家族)をととても大事にします。

孔子はかつてこう言いました。

「人の下なるもの、其はなお土か!これに植えれば、すなわち五穀を生じ、これを掘れば水が湧き出し禽獣育ち、生ける人は立ち、…」土の効力がどれほど素晴らしいかということ孔子は



みみずのたはこと 上:
徳富健次郎(蘆花)、岩波書店 1938

- 土の上に生まれ、土の生むものを食うて生き、而して死んで土になる。我等は畢竟土の化物(ばけもの)である。土の化物に一番適当した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活の方法の中、尤もよきものを選び得た者は農である。
- 乾(けん)を父と稱し、坤(こん)を母と稱す、Mother Earthなぞ云って、一切を包容し、忍受し、生育する土と女性の間には、深い意味の連絡がある。土と女の連絡は、土に働く土の精なる農と女の連絡である。

言っているのです。

同じことを日本の徳富蘆花(とくとみ・ろか)は「みみずのたはごと」という詩の中で、「土の上に生まれ、土の生むものを食うて生きて而して死んで土になる。

我等は畢竟土の化物(ばけもの)である。

土の化物に一番適当した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活方法の中、尤もよきものを選び得た者は農である。」これは本当に本質をついていますね。

我々がどんなにかっこいいことを言っ、どんなに都会で働いてかっこよくても、食べているんですね。

食べているものはどこから来るかという、土なのですね。

その食物を作るのは農業です。

しかし本当に農業の重要さ、土の重要さを身に染みて感じる昨今ではありませんね。

また「乾(けん)を父とし、坤(こん)を母と稱す。

Mother Earth などと云って、一切を包容し、忍受し、生産する土と女性の間には、深い意味の連絡がある。

土と女の連絡は、土に働く土の精子農と女の連絡である。」

Mother Earth を、初めて『土』と翻訳したのは徳富蘆花です。

サピエンス前史という本がありますが、人々の虚構というものが如何につくられているのかという話です。

我々は認知革命、次に農業革命、そして科学革命やった。

そこでも Mother Earth とか、大地とかいうものを経て、我々はどういうにして虚構の世界に入っていったかということです。

一番いい例はお金です。

あんなもの何の意味もないでしょう。

価値あるものですか。

それを契約としてやったのです。

お金というものは虚構のものです。

それを我々は価値あるものとし、そして資本主義を生み出してきたのです。

今でいえばビットコイン(仮想通貨)。

あんなもの虚構ですよ。

人間は虚構を信じたから資本主義を発達させ、今の文化が発展したのです。

神道について 世界でも珍しい土の神様までいる日本！！

伊勢神宮に、5世紀に土宮(つちのみや)が造られました。

古事記と日本書紀。

この二つを合わせて記紀といえます。

古事記：712年(太安万侶編纂、日本最古の歴史書)

日本書紀：720年(舎人親王編纂、神代から第41代の持統天皇(645~702年)迄、日本最初の勅撰の歴史書)

これに沢山の土の神様が出て来ます。

世界中で土の神様がいるのは日本だけです。

数限りなくあります。(石土神社など)

我が国の土の神々

土鎮祭(とこしずめのまつり)というのがあります。

また家を建てたら必ず地鎮祭を行います。

それから大土神(おおつちのかみ)というのがあります。

大地主大神(おおどこぬしのかみ)：土地を守護する神です。

産土大神(うぶすなのおおかみ)：その土地の守り神等々沢山あります。

土の神様と神社が、日本は世界で一番多いのです。

波邇夜須毘売神(はにやすひめのかみ)：女神、土神。

波邇夜須毘古神(はにやすひこのかみ)：男神、土神です。

伊勢神宮の別宮に「土宮」と「風宮」があります。

何故なら外宮(げくう)は農業を祀る場所のためだからです。

「土宮」に祀ってある神は、大土御神(おおつちみおやのかみ)で、「風宮」に祀ってある神は、級戸神(しなとのかみ)です。

土と風は、いわば土壌と環境です。

この二神は農業技術の立場からも重要です。

祝詞の中にも、磐土神(いわづつのかみ)、底土神(そこづつのかみ)

み)、赤土神(あかづつのかみ)等の名前が入っています。
今でも田んぼの神様に、今年も豊作でありますようにとお祈りを捧げています。
また石土神社というのがあります。

ヒンドウ教

ヒンドウ教は自然現象を神格化したものです。
神は、天界・空界・地界の宇宙世界のどこにもいます。
地界の神はプリティヴィーと呼ばれ、母なる大地を意味します。

以上、みてきたように一神教のユダヤ教、キリスト教、イスラム教をはじめ、仏教、道教、儒教、神道、ヒンドウ教の宗教は皆、土と大変深い関係があることが良く分かります。

世界の主な神話

メソポタミア神話、エジプト神話、ギリシャ神話！！

世界の主な神話には、ギリシャ神話、メソポタミア神話、エジプト神話、インド神話、北欧神話、ケルト神話、マヤ神話、日本神話等がありますが、どの神話もやはり土と関係しています。



メソポタミア神話ですが、ギリシャ神話や旧約聖書のもととなった物語(アダムとイブ、箱舟など)が含まれますし、世界最古の神話です。

ギリシャ語で「二つの川のあいだ」を意味する、ティグリス川とユーフラティス川。

シュメール人が、文字で神話を粘土の石板に刻み残しました。

また奇妙な姿の神や魔物が登場します。

例えば、あらゆるものの母である女神(ティアマト)は、上半身が人間、下半身がヘビまたはドラゴンです。

旧約聖書に出て来るアダムとイブは土から創られます。

またマルドゥイは農業神で、エンキは地の王、湿地です。
クルは大地の神(生きた山)、冥界神です。

エジプト神話は、キリスト教、イスラム教が広まる以前に、古代エジプトの人々によって信仰されてきた神々の体系、宗教をさします。

ナイル川の傍で、サハラ砂漠の厳しい暑さを身近に感じたエジプト人は、太陽や風などの自然を神として恐れ敬いました。

またヒエログリフ(神聖文字)、デモティック(大衆文字)を使用しました。

またラー(太陽神)のもとにゲラ(大地神)がいます。

ギリシャ神話は、大地の女神ガイアがいます。

ガイアとはギリシャ神話に登場する女神で、地母神で大地の象徴です。

但しガイアは天をも内包した世界そのものであり、文字通りの大地とは異なる存在です。

「神統記」によれば、この世の初めには混沌としたカオスとエロース、エレボス(暗闇)とがあった。

ガイアはカオスから生まれ、タルタロス(奈落)、エロースなどと同じく、世界の始まりの時から存在した原初神です。

土壌とノーベル賞

土の中の物質、微生物がノーベル賞受賞へ！！

土壌とノーベル賞と関係があるのかという話ですが、フリック・ハーバーという人が、1918年にノーベル化学賞を受賞し、カール・ボッシュという人が1931年に同じくノーベル化学賞を受賞しました。

窒素肥料を発明したのです。

現在大気中には、78%の窒素ガス(N₂)が存在しますが、それを固定しアンモニアにして肥料にしたり、ダイナマイトにしたりして、二人とも農学者ですが、ノーベル化学賞を受賞しました。

それからセルマン・ワックスマンという人は、1952年にノーベル生理学・医学賞を受賞しました。

彼はストレプトマイシンを土の中から発見しました。

土の中にストレプトマイシンという物質が有り、抗生物質として利用され多くの人命が助かりました。

またゴア元米国副大統領と IPCC が、2007年にノーベル平和賞を受賞しました。

しかしゴア元大統領と IPCC がやったわけではなく、私達が出した第1次から第4次までの IPCC の評価報告書が評価され、ゴア元副大統領と IPCC がノーベル平和賞を受賞したわけです。

ということで私にもゴア氏と IPCC から感謝状が届きました。
これがその写真です。



次にもう一つは、北里大学特別荣誉教授の大村智さんが 2015 年に、ノーベル生理学・医学賞を受賞されました。

大村 智：ノーベル賞

- **大村 智**（おおむらさとし、1935年）は、日本の有機化学者。北里大学特別荣誉教授。薬学博士、理学博士、有機合成化学、触媒開発研究。
- ノーベル生理学・医学賞受賞。アレキシス・カレルも。
- 静岡県伊東市内のゴルフ場近くの土壌中から、新種の放線菌「**ストレプトマイセス・アベルメクテニウス**」を発見。寄生に有効。
- 寄生虫による風土病の治療薬として実用化した「**イベルメクチン**」はアフリカなどで無償供与され、世界で年間3億人を失明の恐怖から救っている。

これは土の中の放線菌で耳の中に入って、目から出ていく線虫を殺す薬(抗生物質)を発明したのです。

土もノーベル賞と関係しているということです。

大村智さんは、土の中から新種の放線菌「ストレプトマイセス・アベルメテニウス」を発見し、寄生虫に有効な薬を作ったのです。アフリカには眼の悪い人が沢山います。

土の中の線虫が、人の体の中に入り込み卵を産みます。

卵がかえって幼虫になると、体から一番出て来やすいところが眼の部分です。

そこから線虫が出て来るために眼をやられてしまうのです。

それでこれをイベルメクチンという薬として実用化して、アフリカ、南米、アジアで無償供与されて約3億人の患者を治し、失明の恐怖から救っているのです。

大村先生はゴルフが大好きで、ゴルフ場の土を一寸ポケットに入

れてきて弟子たちに分析させて、その中に菌を探しイベルメクチンとして発表したのです。

ちなみにこの土は、静岡県伊豆半島のゴルフ場の土ということです。

「土」にまつわる恐るべき事実！

18cmの奇跡

土がどのようにして出来ていったかということ、**「18cmの奇跡」**という本に、私が書きました。



地球上の陸の土壌部分、表土層を集めて平均したら、たった18cmしかないのですよ。

恐るべき少ない量ですね。

我々はそれでこれまで生きてきたし、それをもってこれからも生きていかなければならないのですよ。

多くのことは過去を知って分かります。

多くの神話と宗教は、すべからく、土というものを大事にしていることが分かりました。

我々はこの土なくして、我々の生そのものがあり得ないし、孫、ひ孫と続いていくのに、この土が必要であるということが少しでもお話しできればよかったですかなと思います。

- 完 -

文責：環境問題研究委員会 赤城勲

2018年6月18日